

本号はボリュームが大きいので2通に分けて配信します

## INDEX

- 1 みちのくイエス るう@大喜多秀起
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(8) 高橋弘  
多妻婚を偏愛した男、ジョン・テイラー
- 3 投稿 オムナイ掲示板誹謗中傷の顛末 北龍

### るう@大喜多秀起 みちのくイエス

青森県新郷村をご存知だろうか。イエス・キリストの墓があることで有名だ。伝説ではコルゴダの丘で死んだのは実はイエスの弟であって、本物のイエスはエルサレムを脱出し、この村で余生を全うしたと言うのだ。村ではイエスを偲んで毎6月には「イエス・キリスト慰霊祭」が行われ、神官が墓の十字架に向かって祝詞を上げ、その後村人が十字架を回って盆踊りをすると言う。敬虔で厳格なキリスト教徒からすれば、なんともとんでもない激怒もの話して、抗議殺到ではないかと思いきやそうでもないようだ。もちろん、村の方々もイエスが村で死んだとは本気で信じてはいない。ただ、墓(らしきもの)があるのは事実であって、そこに眠っている人がいるならそれを祀るのは当然だと思っっている。たまたまその墓のがイエス・キリストのものと言う伝説があったと言うことに過ぎないという。こうしたおおらかさがこの伝説を許してしまっているのだろう。

ところで、イエス・キリスト出現のやエルサレム脱出などの話しはモルモン書にも記載されている。あれこれしかつめらしい理由をつけているが、客観的にみれば、モルモン書の内容など「みちのくイエス」と同類だ。むしろ、御用学者を動員しもってもらしい言い訳をしている点ではもって始末が悪い。その上、モルモン教ではモルモン書に書かれたことは真実と信じないといけぬ。そして、それを受け入れないと救われないし、受け入れれば選民意識も共有できる。

信教は自由である。何を信じようとどんな祭儀を行おうと自由である。それ自体は人から見て「けったいなもの」であっても抑制することは出来ない。しかし、その教えを受け入れないと救済されない、などと言い出すと危険だ。既にカルトの入口だ。これは断固、糾弾されるべきだ。

新郷村のみちのくイエスの伝説とモルモン教、ばかばかしさは甲乙つけがたい。しかし、「みちのくイエス」の方がはるかに健全である。そして、イエス・キリストの精神に近い。

### 高橋弘のモルモン人物伝(8) 多妻婚を偏愛した男、ジョン・テイラー

モルモン教会第三代大管長、ジョン・テイラー(1808~89)。イギリスに生まれ、16歳のとき英国国教会からメソジスト教会に改宗。17歳で信徒説教師になる。その後家族とともにカナダに移住。28歳のときモルモンの指導者パーリー・ブラットに会いモルモン教に改宗し、オハイオ州カートランドに移る。その後テイラーはモルモン教と運命を一つにする。翌年ミズーリ州ファーウェストに移り、1838年に使徒に任命される。やがてモルモン教徒はミズーリから追放されイリノイ州へと遁走。彼らが築いた街ノーヴーでは、テイラーは市議員、市民軍の大佐、軍事裁判所の法務官、モルモン教会の各種新聞編集に携わった。

モルモン教会が否定し続けた多妻婚を暴露した元モルモン教会指導者の印刷所を襲撃してスミス兄弟が逮捕され、カセージ刑務所に監禁されたが、その土地の自警団に襲撃されたとき、テイラーは教祖スミスをかばい数発の銃弾を浴び重傷を負った。それゆえにテイラーは信徒たちからは「殉教者」扱いされ敬愛を受けることとなった。

スミスの死後テイラーはヤングを次期指導者として支援し、ヤングが二代目大管長になったときテイラーは副管長にはならなかったが常にヤングの右腕として活躍した。実際テイラーはユタでは、準州の裁判所副判事(1849~50)、準州議会議員(1853~54, 1857~79)準州下院議長(1857~)その他の公職や、ヤング同様数多くのビジネスを手がけている。テイラーの活動は多岐にわたっていて、この短い文章で紹介しきれものではないが、短い教育しか受けなかったにもかかわらず、モルモン教会のなかでは知的な教養人として敬意を受け、ヤングからも信頼されてきた人物である。

#### 【多妻婚を制度化した男】

ジョン・テイラーは、教祖ジョセフ・スミス、二代目指導者ブリガム・ヤングの影に隠れて目立つ存在ではないが、モルモン教会に大きな影響を及ぼした人物である。それはたとえば、スミスやヤング同様に、あるいは彼ら以上に熱烈に多妻婚を偏愛し擁護した男であり、多妻婚をモルモン教会の教理として定着させ、多妻婚の放棄に対して最後の最後まで抵抗した男であった。つまりモ

はテイラーである。

テイラーの死後、大管長に就任したウッドラフ、ジョセフ・F・スミスも多妻婚を続けたが、しかし政治的判断から多妻婚を断念する妥協の道を選択した。しかしヤング亡きあと、テイラーは多妻婚を信仰における眞の栄光と結合させ、モルモン教団が多妻婚を断念することなど金輪際ありえないことを断言し、最後には連邦役人による逮捕・監禁から逃れるために「地下生活」を送り、一方では、メキシコ、カナダに多妻婚を継続できるコロニーを作り、教団の多妻婚の生き残りを図った。

今日にいたるまで「多妻婚」をモルモン信仰におけるもっとも神聖な教え・原理として守り続けている「モルモン原理主義者」は、その権威の源泉をジョン・テイラーに求めている。「モルモン原理主義者」たちによれば、テイラーは死ぬ前に、弟子ジョン・ウーリー(John Woolley)や他の神権を保持するモルモン教徒たちに、多妻婚を執り行う権威を授けたばかりでなく、多妻婚を執り行う権威の授与をすら弟子たちに与えた。それは、神の千年王国到来まで多妻婚を行う「モルモン原理主義者」たちの子どもが毎年誕生することを担保するためであった。

ジョン・テイラーの息子、使徒ジョン・W・テイラーによれば、テイラーは連邦政府の役人による逮捕・監禁から逃れて生活していた1886年、彼の死の三年前、逃亡先のジョン・ウーリーの家で、多妻婚について神に祈り求めたとき啓示を受けた。その啓示では、神はテイラーに「多妻婚の原理が廃止されたりすることは決してない」("... the Lord told (my father) that the principle of plural marriage would never be overcome.")と語ったという。啓示は書き留められ、数人の指導者がそれを書き写したという。その中には後の大管長ジョセフ・フィールドینگ・スミスもいる。1933年、テイラー家はこの手書きの啓示をモルモン教会に寄贈した。1974年、モルモン歴史教会会長リード・ダーハムはテイラー自らの手書きの啓示を調査し、これをテイラー自身の本物の手書き文章であることを確認した。またこの啓示が1886年の啓示である蓋然性の高さを指摘している。

#### 【指導者が平気でウソをつく伝統】

かつて教祖ジョセフ・スミスは「何をしてもfriendsを決して裏切るな」と信徒たちに語ったことがある。Friendsとは同信のモルモン教徒のことであり、さらには教団の指導者たちを指していたと思われる。テイラーはこの教祖の教えを座右の銘として生涯にわたって堅く守りつづけた。テイラーについて大書しておきたいことは、「ウソも方便」「目的は手段を正当化する」と考えそれを実行したことである。テイラーはオハイオ州カートランド時代からモルモン教会に加わり、ミズーリ、イリノイ、ユタと教団の苦難の運命を共にしてきた男であった。この間、テイラーは敵を欺き、混乱させ、苦杯を飲ませることに腐心してきたのである。

テイラーにとって、ものごとはすべて白か黒、オール・オア・ナッシングであった。敵と戦うとき、その最大の罪は(味方の、モルモン教会の)裏切りであり、また同時に、敵を支援し敵に便宜を図ることである。テイラーにとって真理は相対的なものにすぎない。戦争の基本は、敵を混乱させ、欺くことである。そのため全ての手段は正当化される。背信の徒や裏切り者はすべからず排除されねばならない。なぜなら、そういう輩は根っからのウソつきであり、その人間性は腐っているからだ。裏切りは最大の罪である。なぜかなら、裏切り者はウソを述べるからということより、そいつは秘密をさらけ出すからであり、さらには、本当のことを暴露するからである。それは敵に弾薬を与えるようなもので、重大な裏切りであった。

こうして、モルモン教の指導者・大管長は、教祖ジョセフ・スミス以来、敵である部外者のみならず、信徒にたいしてさえも平気でウソを語る習性があり、平気でウソをつくことがモルモン教指導者の伝統になっている。モルモン教幹部の内面では、モルモン教会の利益になることなら全てが赦される、という考えがあるからである。

そのように見てくると、ジョセフ・スミスが生前に語ったウソ八百は、一つには無教養の表出であるが、同時に、教団の存続のために取られた手段であったことが理解される。「ダナイト団」のような自警団や、「カウンスル・オブ・フィフティ」のような影の支配集団を形成し、教団を一種の秘密結社にしていたのも、一般信徒にすら秘密裏にことを運びたかったからであろう。スミスやそれに続くモルモン指導者には、結果さえよければ、全ては赦されるという思考形態があった。しかしながら一般信徒にとっては、全てが極秘のうちに決定され、その向かう方向すら分からない盲目的服従を強いられる体質が作られていったのである。

そのウソの典型が多妻婚であった。すでに教団では多妻婚を公然と実行していた1850年、テイラーはフランスでの公開討論で、モルモン教会は多妻婚のような破廉恥な行為とは一切関係ないと断言していた。しかしマイケル・クインの研究では、テイラーにはその時すでに12人の妻がいたにもかかわらず、テイラーは次のような反吐の出るような白々しいウソをついていた。

「われわれ(モルモン教徒)は今ここに、多妻婚を行っているのではないかと非難されている。多妻婚はもっとも汚らわしく猥褻で胸がむかつくような行為であり、心が邪悪で腐れきった人間でないかぎり為しえない行為である。多妻婚はあまりに常軌を逸した信念である・・・私は、われわれモルモン教徒の純潔と結婚について、われわれの信仰を表しているモルモン教会によって出版されたものを読むことで満足したいと思う。『教義と聖約』330頁(1850年版)である。

このイエス・キリストの教会(モルモン教会)は姦淫と多妻婚の罪を非難

であり、また一人の女は一人の夫をもつべきであることを宣言する。ただし相手が死んだ場合にはこの限りではない。その場合は双方とも再度結婚する自由がある」。註1

ジョン・テイラーは信徒にたいしてすら、自分の妻は7人だと公言していた。しかし実際には少なくとも17人の妻がいた。最後の妻はテイラーが死ぬ3年前の78歳のときに娶った26歳のジョセフィーヌであったが、その歳の差はじつに52歳であった。

【多妻婚は女性の人権を無視する犯罪である】  
終りに、あまりにも残酷な事実を指摘してこの稿を閉じることにしたい。モルモン教会は長い長い間、一般社会からその教会の闇の部分、暗い歴史を隠蔽し秘密にしてきた。そういう隠蔽とか秘密にして決して公開しないというやり方そのものがまさにモルモン教会のやり方である。  
多くの例が示すように、多妻婚は少女や若い女性を老いた男性信徒に強制的に結合させるための「信仰」の名を借りた犯罪的メカニズムである。モルモン教会は、こうした無力な少女やその他の多妻婚の女性たちを助けることはなかった。教祖ジョセフ・スミスも二代目ブリガム・ヤングも、また三代目ジョン・テイラーも、こうした多妻婚という慣習が長期的に幼い少女や女性たちにどのような影響を与えるかについて考えた形跡すらない。多妻婚が実行に移されたイリノイ州でも、また移動したユタや、多妻婚存続のためにコロニーが作られたメキシコやカナダでさえ、重婚(多妻婚)は違法行為であった。したがって多妻婚はいつの時代でもまぎれもない犯罪であったのである。だからモルモン教とは、モルモンの男たちがその犯罪性を意識しつつ、つねに犯罪人として逮捕・監禁におびえつつ、しかし同時に多妻婚を信仰という名目で何とか正当化しようと試みてきた男性宗教の典型例なのである。

-----  
註  
ジョン・テイラーについてはいろいろな書物や研究書がすでに存在する。マイケル・クイン、サンドラ・タナー、B・H・ロバーツ、などである。日本でもアメリカのTVドラマ「ボナンザ」が放映されたが、これは作家サミュエル(サム)・W・テイラーの作品である。このサム・テイラーはジョン・テイラーの孫であり、ジョン・テイラーについて書いた「ザ・ラスト・パイオニア」という小説がある。しかしその小説は結局、テイラーを美しく描く歴史小説にすぎないと、カリフォルニア大学のフォーン・プロディが書評をしている。

-----  
註1 "We are accused here of polygamy, and actions the most indelicate, obscene, and disgusting, such than none but a corrupt and depraved heart could have contrived. These things are too outrageous to admit of belief; therefore ... I shall content myself by reading our views of chastity and marriage, from a work published by us, containing some of the articles of our Faith. 'Doctrine and Covenants,' page 330. [1850 version] ... Inasmuch as this Church of Jesus Christ has been reproached with the crime of fornication, and polygamy, we declare that we believe that one man should have one wife, and one woman but one husband, except in case of death, when either is at liberty to marry again..." (A tract published by John Taylor in 1850, p.8; found in Orson Pratt's Works, 1851 edition).

投稿 オムナイ掲示板誹謗中傷の顛末 北龍

北龍です。あの悪名高き「オムナイ掲示板」で私に対する誹謗中傷が行なわれました。その顛末を投稿と云う形みなさまに報告させていただきます。  
オムナイの「裏掲示板(モルモンの泉 談話室)」で私は数名の参加者と議論を交わしていました。その中の一名が私とその人の個人的メールの内容を掲示板で公開して、私を攻撃し始めたのです。私とて、私個人のプライベートに関する事をあまり公開したくはないのですが、今回の件はあまりにも悪質と考え、皆様に問題提起すると言う意味でも公開させていただきます。

その参加者に私はまだモルモンに在籍している当時、私が個人的に患っている「うつ病」の事を相談した事があったのです。その参加者はその事を取り上げ私のうつ病を心配するふりをしながら、巧妙に私の人格攻撃を展開して行きました。もう一名の参加者もその人格攻撃に乗り、調子に乗って私を攻撃し始めました。到底まともな議論と呼べるものではなく、単に私を誹謗中傷し、侮辱するものでした。私は管理人のオムナイに携帯メールで再三削除を要請しました。しかし、オムナイは完全にそれを無視し、当該書き込みを放置し続けました。やむなく、私は配達証明付内容証明郵便でオムナイに再度削除要請をしたのです。「法的手段も辞さない」と言う文言つきで。  
オムナイは、私からの内容証明郵便を受け取ると慌てて当該スレッドを削除しました。なんだかわけのわからない言い訳をし、素直に謝罪もせず。私は当然その事に再びメールで抗議しました。その抗議に対するオムナイの返信がこうです。  
「クリスチャンとして彼らに接してください。」 - 3/4 -

。そして、掲示板参加者の一人がまたしても私の人格攻撃を始めてきました。私は憤慨し、再びメールでオムナイに「法的手段にでる。」と抗議したところ、またしてもオムナイは慌てふためいてスレッドごと削除しました。やはり、謝罪の言葉はありません。

私もかつては「オムナイチルドレン」の一人でした。「オムナイ掲示板」で今考えると恥ずかしいようなおバカな投稿をしては喜んでいました。もし、私が今でもオムナイチルドレンのままなら当該掲示板参加者のように、調子に乗って喜んで誹謗中傷する側に回っていたことでしょうか。我ながら恐ろしくなります。

そう考えると、オムナイとオムナイチルドレンたちも、カルトの被害者であり、加害者でもあると思います。

私自身、オムナイチルドレン時代はカルト加害者として誰かを傷つけていたでしょうから。オムナイとオムナイチルドレンたちにその事を自覚させるためにも、勇気と真実の会の活動はこれからますます重要になってくるのかなと愚考いたします。

以下後半に続きます

メールマガジンバックナンバーはこちらから  
<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>  
メールマガジンの購読申し込みはこちら  
[http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe\\_mailmaqa.htm](http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmaqa.htm)

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス [jemnet@infoseek.jp](mailto:jemnet@infoseek.jp)

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.  
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。  
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

-----  
このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。